難波西鶴と海の道

【46】

森田　雅也

西鶴の長崎商い

博多の金屋　再起かけた逸話

閑話休題。西鶴の長崎商いの話に戻します。前々回『日本永代蔵』［元禄元（1688）年刊］巻四の二「心を畳込む古筆屏風」に、朝鮮の商人に不実な商いを行った日本の商人を批判する記述があることを紹介しました。西鶴はその評言として、「これを思ふに、人をぬく事は跡つづかず。正直なれば神明も頭に宿り、貞廉なれば仏陀も心を照らす」としています。

「人をぬく事」とは、人をだます事です。「貞廉」とは正直です。西鶴は何しろ、商売は正直にしなさい、そうすればお釈迦様もいいことをして下さるというのです。さすがは天下の商人が集まる難波を知る西鶴の言ですね。

ところで、肝心の長崎商いの話ですが「とかくは天に任せて、長崎商ひせし人、筑前の国博多に住なして、金屋とかやいへる人、海上の不仕合わせ、一年に三度までの大風。年々の元手打ち込みて、残る物とて家蔵ばかり」と主人公を紹介します。

長崎商いは運任せ。その商いで生計を立てている博多の金屋某という商人は、ある年、1年に3度も海上で大風に遭い、船も積み荷も失い、その賠償などに今までの蓄えをつぎ込んでしまい、残った物は家蔵だけとなってしまいます。

そのため使用人たちも辞めさせ、妻子ともにその日暮らしの生活となってしまいます。こうなると、海の商いが嫌いになり、孫子の代まで海の商いはしないように心に誓いを立て悶々とした日々を暮らすようになります。

ところがある日、ふと目にとまった蜘蛛が、三たび糸が切れても、巣をはり続け、食物を得ようとするくじけない姿を見て、一念発起し、乾坤一擲、四たび、長崎商いに挑みます。

そこで家屋敷を処分し、少しばかりの商品を仕入れて、長崎の市場に立ちますが、舶来品が多く売られる市では勝負になりません。唐織・薬種・鮫皮・諸道具など、並ぶ舶来品はどれも宝の山。買っておけば値が上がるのは間違いないのですが、元手が足りません。

知恵、才覚では誰にも負けない商人金屋なのですが、京や堺の商人がぼろもうけするのを切歯扼腕。自暴自棄になってしまいます。

ところで当時、商人が売買目的で長崎の舶来品を購入すること、すなわち長崎貿易に参入するためには高いハードルがありました。

これはいわゆる「市法貨物商法」と呼んでいる制度です。

金屋も全財産を処分して挑んでいますから、革袋には「50両（約500万円）」も持っていたのですが、それだけではとても足りません。まさしく「蟷螂の斧」だったのです。詳しくは次回に続きます。

（関西学院大学文学部文学言語学科教授）